



日本共産党前都議会議員 《東京民報折込み版》

そねはじめレポート

2012年 3月28日発行 第 38 号

そねはじめ事務所

114-0032

北区中十条2-11-6

Tel:3907-1135

Fax:3906-3225

最悪のシナリオ・消費税増税くい止めよう

飛鳥山支部の学習講演会でそねはじめ前都議が訴え 経済サイクル直し直し不況打開できる

日本共産党の飛鳥山支部主催で「消費税をなくす全国」の木口力氏を講師に、野田政権が強行しようとしている消費税増税の最悪のシナリオについて学習しました。

★国民から吸い上げ

財界には減税のサービス

木口氏は、消費税をなくす会発の分かりやすいパンフレットにそって消費税増税が国民生活のみならず、日本経済までどん底に陥れると訴えました。

★社会保障と国の赤字

埋める財源はどこ？★

講演のあと、「増税止めたら、社会保障はどうなるのか心配で仕方がない」との質問に答えて、民主党も自公政権と同じく国民から吸い上げて財界に減税サービスすれば儲けが還元されるといふが、一〇年間戻ってきたためがない。逆に、大企業の三百兆円近い財源を雇用拡大や社会

保障負担、震災復興にはき出させれば、ふところに余裕ができた国民が企業の商品を買い始め、国内経済が回りだし、国の税収も増えるゆい一つの道だと説明しました。

★いま増税許すな的一点共同を★

そねはじめ前都議と池内さおり青年部長が連帯のあいさつで「商店街でも団地でも、いま増税されたら大変だという声を集めてはね返そう」と、10%増税をやめさせる提言を広げる決意を表明しました。



学習会であいさつするそねはじめ前都議

区民サービスの基金より区役所や駅前開発基金を優遇

北区議会最終本会議で共産党区議団がきびしく批判

3月26日に北区議会の最終本会議が開かれ、日本共産党区議団はのの山けん区議が予算に反対の討論を行いました。

◆2012年度予算では、共産党が求めてきた住宅耐震補強助成の倍増、住宅リフォーム助成の延長、防災無線の充実など実現し、放射能対策では学校給食の食材測定がようやく始まります。

◆しかし花川区長は、国の消費税増税を傍観する態度。

また区民サービス向けの財政調整基金に新たな積み立てをせずゼロにする一方で、決っていない区役所建替えや十条駅前開発に20億円も基金を積むなど聖域扱い。逆立ちした財政運営を批判しました。

◆区立保育園を丸投げした民間法人が保育士の大量退職で委託を放棄し、大事な保育まで区の責任が果たせない事態に反省がないことにも、民間丸投げを見直せと迫りました。

女性の集いで展示品を見学するそねはじめ前都議



都予算組替え提案・一般会計の3%で介護・医療値上げ抑え防災充実できる 都議団が予算委員会に提出

都議会予算特別委員会の採決日を前に、3月23日に日本共産党都議団のたぞえ民夫議員が、2012年度都予算の組み替え提案について、記者会見で発表しました。

今回で17年連続となる予算の組み替え提案は、防災・放射能対策・福祉医療・中小企業・雇用対策・被災者支援などを重点に組まれました。

組み替え財源としては、外郭環状道路の約100億円、

八ツ場ダム、築地市場豊洲移転、五輪招致など都民が「要らない」と考える約千九百億円を削りオリンピック基金の取崩しと合わせ1930億円を予算化。

【防災 都営住宅など】

一般会計3%分で高齢者の介護保険・医療保険値上げを抑え、放射能のホットスポットの除染、老朽木造アパートの都民に都営住宅緊急整備などを予算に加えます。

3・11さよなら原発集会とパレードに参加した左端がそねはじめ前都議、右端が池内さおり予定候補と本田正則区議(その右)



★★シリーズ 若者はいま...<2>



**若い仲間の疑問に答える
青年党員が宣伝ビラ作成。**

横浜北東地区委員会事務局に勤める26歳の専従党員Kさんが日頃の同世代の疑問に「いねいに答えるビラ」を創り2色印刷普及し頑張っています。

「党名を変えたら」「なぜ社会主義はイメージ悪い?」「何でも反対では?」など共産党と触れ合う機会の少ない青年の目線からの声に答えています。

堀船支部で入党間もない若手Nさんは「自分も作ってみたいと思っていた。さらに工夫してみる」と検討中です。

4月27日(金)午後7時 赤羽会館演説会 あとちょうどひと月

連休直前の夕べに、ぜひ消費税増税とたたかう日本共産党の政策責任者小池晃の演説、池内さおり・そねはじめの訴えをお聞き下さい。

■小池晃政策委員長
池内さおり 12区青年部長
そねはじめ前都議会議員

そねはじめ交友録<その三十二> 障害者を描いた作家・丘修三さん

20年前、私が区議当選後も児童文学の同人誌の全国大会に参加していたとき、ふいつとこの集まりに参加して、たちまち「ぼくのお姉さん」など障害者を温かく描く作品を出版したのが都の障害児学校の教員である丘修三さんでした。読者に、障害とともに生きる子どもたちの悲しみ・喜び・誇りある人生を垣間見せてくれる珠玉の短編集。私は灰谷健次郎の「兎の目」「太陽の子」などのすこし強引な切迫感に比べ、おおらかさを感じました。

残念ながら障害児教育に対する考え方は、私たちが「障害は人間にとってハンディーであり、その教育は専門的な場である障害児の学校が必要」という考え方と「健常児とともに学校に通える条件を最大限保障すべき」とする丘さんたちとで一致せず、作品合評を離れて論争もしました。最近では未来の教育は後者であって欲しいと私も感じるようになりましたが、私の場合これは逆にきびしい教育現場との接点が薄れたせいかもしれません。

児童文学の書き手仲間との交流で。右端がそねはじめ前都議。左は障害者作家Hさん。

